

「心をひとつにして福音の信仰のために」 ～新型コロナウイルス時代を生きる教会～ パート 2

2021年11月 日本福音同盟（JEA）神学委員会

目次

- 1 「身体性も超身体性も～聖書に従って」（pp.2-9） 赤坂泉
- 2 「集められる恵み」（pp.10-15） 山田泉
- 3 「神のことばの伝達と媒体～ポスト・コロナに向けて」（pp.16-20） 千代崎備道
- 4 「これからの教会の在り方を考えるーポスト・コロナ時代を見据えてー」（pp. 21-26） 篠原基章
- 5 「コロナ禍で問い直す社会・政治・経済」（pp.27-33） 青木義紀
- 6 「AI 技術の成熟と教会を考える～30年後を見据えて～」（pp.34-38） 能城一郎

新型コロナウイルス感染が広がってから2年になろうとしています。この間に日本も世界も感染対策に翻弄されてきました。教会の集まりにもすぐに影響が出始めて、感染拡大が顕著な都市圏の教会は、集まって礼拝を守ることから、オンライン礼拝に移行することを余儀なくされました。

そのような大きな変化の中、昨年5月に JEA 神学委員会では「新型コロナウイルス時代を生きる教会」を発行しました。JEA 神学委員の方々がそれぞれの見地から、コロナ禍の教会の対応について神学的な考察をエッセーにまとめてくださいました。まさに危急の対応であり、執筆された先生方も先の見えない状況の中で、神学的に何らかの解答を導き出すのではなく、コロナ禍にある教会を励ます目的で書いてくださいました。

さらにそれから1年が経過しました。その間に何度も感染の波を繰り返しながら、また春から始まったワクチン接種の広がりとともに、現在に至っています。感染者が多い都市部の教会では、オンライン礼拝や配信礼拝が定着しつつある状況です。このような中で私たちは改めて、キリスト者が身体をもって教会に集められる意味、集まって礼拝をささげるこの意味について考えさせられています。教会は新たにオンラインというツールを自分たちのものとして用いることを始めました。そこにはこれまで気づかなかった利点も多くあります。しかしその一方で、身体をもって集まらないことの弊害や警戒すべき点もたくさんあります。この1年間、コロナ禍の中で教会は多くのことを学んできました。

JEA 神学委員会では「新型コロナウイルス時代を生きる教会」を発行した後、JEA 総会や JEA 宣教フォーラムで様々なレスポンスをいただきました。そのようなレスポンスを受けながら、日々刻々変化していく状況の中で委員がさらに考え、今後の教会の方向性を見ながら、この度「新型コロナウイルス時代を生きる教会パート2」を執筆しました。6名の委員による神学エッセーから、私たちが学ぶべきこと、議論すべきこと、警戒すべきこと、考えを深めるべきこと、多くのことを教えられると思います。ぜひお読みいただくと幸いです。

JEA 総主事・岩上敬人

1 身体性も超身体性も～聖書に従って

赤坂 泉

聖書宣教会・聖書神学舎

コロナ禍は世界中の教会を「集まること」にかかる状況の激変に直面させました。未知の感染症との戦いは手探りの多様な対応を強いることとなり、集会の開催や外出そのものさえ厳しく制限された国々も少なくありません。日本では私権制限に慎重な面と国民性に期待する面なども手伝って、概ね協力要請で対応がなされてきました。その中で諸教会は独自の検討と判断を求められ、限られた知見で、急いで、仮の判断を重ねることが続きました。各教会においても教団教派や諸団体においても、多様な考えや感情が交錯した2020年度を過ごしたと思われまます。

1. コロナ禍と諸教会

(1) 集まりの形態よりも集まりの目的 (2020年5月の神学エッセー集で)

JEA理事会の要請に応じて上記に寄せた短文では、「集まり」について考えました。ヘブル書10章25節を手がかりに、聖書の関心が教会の集まりの形態よりも集まりの目的にあることを示し、愛と善行を促すために互いに注意を払うこと、そのために集まり、そのように励まし合うことを大切にしたいと述べました。

(2) 身体性拡張の可能性と懸念～全人性の軽視

2020年9月のJEA宣教フォーラムでは、<「いっしょに」集まる幸い～教会の本質を見つめ直して>として発題し、新約聖書から教会の「集まり」かたを俯瞰して、教会の地域性 (locality) と共同性を確認しました。また、現代の身体性「拡張」とその周辺課題について紹介し、考察し、今後の「集まり」かたに係る課題についても考えました。特に、身体性の「拡張」に伴う可能性と限界を考え、懸念として全人性からの乖離の危険を挙げ、それが神との関係のあり方そのものさえ変化させる恐れがあることを指摘しました。それゆえに大切にしたいこととして三つ：1) 教会のアイデンティティの堅持、2) 変えてはならない本質的なことを見分けて堅持すると共に、文化脈に応じて調整可能あるいは新たに採用できることについて検討する柔軟性、3) 教会の働きが要請する身体性を軽んじないこと (使1:1,2; 1ヨハ3:18; ガラ5:1~6:10; ヘブ10章参照) を数えました。

身体性拡張の技術はコロナ禍以前から日常に浸透し始めていたものです。第四次産業革命やソサイエティ5.0といった呼び声は、いずれも2016年には聞こえています。世界で注目を浴びたユヴァル・ノア・ハラリの『ホモ・デウス』¹やマックス・テグマーク『LIFE3.0——人工知能時代に人間であるということ』²の原著はどちらも2017年で、近未来について考察したものです。そして、実際に人工知能 (AI) やXR (VR, AR, MRなどの仮想空間技術、空間拡張技術の総称) が加速度的に日常生活を変化させています。例えば

LINEのチャットボットは、商用ばかりでなく、行政サービスでも採用されています。オンラインの活用は会議や授業、診療に、旅行に、とコロナ禍で一気にその領域を広げ、キリスト教会の礼拝や諸集会にも及びました。

ここで、特に懸念されるのは全人性軽視の危険です。例えばオンライン会議では他者に見えるのは、自分がカメラの画角に入ることを許したものだけです。自宅からの参加なら、上半身にネクタイ、下半身はパジャマで会議に出席可能だと考えるかも知れません。画角の外に、本務とはまるで無関係な趣味や内職を配置してあって、関心は終始そちらに向いている、ということだってあり得ます。対面の会議ではそうは行きません。身体がそこにあることが全人的な参与を担保するわけではないとしても、それでも対面とオンラインに大きな違いがあることは否めません。拡張した現実における「集まり」は、全人的な参加を軽んじる傾向をはらみます。会議や授業でも懸念されることですが、ましてや礼拝において、オンラインの活動が、礼拝者に全人性を軽視させる危険があるとすれば、これは大きな問題です。

(3) 改めて

コロナ対応も一年余を経験してきた今、改めて教会の「集まり」について考えます。教会にとってオンラインの礼拝やオンラインの諸活動は、緊急避難的な、不可避の次善の対応であって、時を経て、速やかに解消すべきなのか。あるいは現代の文化脈に照らして大いに活用すべきことなのか。両面から検討するために、はじめに身体性拡張に関して新約聖書から考察しましょう。

2. 新約聖書における身体性と超身体性？

(1) 主イエスにおいて

主イエスは受肉して、人の肉体をもってこの世に来てくださり、その身体を用いてみわざをなしてくださいました。ご自身の身体を十字架に渡し、からだをもってよみがえられたことの重要性は言うまでもないこと。病人に手を置き、ツァラアトの人に敢えて手を伸ばして触れ、死人の手を取って起き上がらせ、パンを祝福して群衆に与え、弟子たちの足を洗われるなど、主は、ご自身の身体を用いてみわざをなさいました。このような記録の仕方は、当時の人々にとって意味あるからというだけでなく、主イエスが身体性を重視されたことをも示唆するためなのかも知れません。

一方で、マタイ18章20節(二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいる)や、マタイ28章20節(わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともに)などの言明は、謂わば、超身体性の宣言です。主は、物理的な身体に制約されることなく、臨在してくださいます。

(2) パウロにおいて

これだけならば、イエス・キリストにおける特殊性ということになりますが、例えばパウロにおいても類例を見ることができます。

第二次伝道旅行の当初の目的（使15:36）や、エペソの教会の長老たちをミレトスに呼び寄せた事実（使20章）などは、パウロが対面の宣教や教授を大切に示しています。書簡もその多くは、願っている対面が妨げられているための代替手段である面があります。（1テサ2:17; 1コリ4:19; 2コリ1:23; ピリ1:27等）

一方で、パウロにも超身体性を意図して語っていると見える場面があります。パウロのこの認識は、今日の教会にとっても極めて重要なので、具体例として1コリント5章の記事を検討する。類例としてコロサイ2章5節もありますが紙幅の都合上割愛します。

（3）1コリント5章1～6節aの検討

この箇所は構文上の重要な問題も多いし、解釈の重要問題も含まれますが、課題を限定して、実際にそこにいる者「のように」と訳すものが多い3節の一語を、「として」と解する可能性について検討します。

まず当該の段落に至る思想の流れです。キリストについての証しが確かなものとなった教会（1:5-7）は、真実な神に召されて、キリストとの交わりに入れられた（1:9）にもかかわらず、一致を欠き、争いと分派に直面しています。パウロは教会の誇りを戒め、「あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあります」（1:30）と念を押します。教会は神からの霊を受けて、御霊のことばによって恵みを知り（2章後半）、正しい土台をわきまえて、神の宮として自らを建て上げるものです（3章）。それなのに、教会に淫らな行いが侵入し（5章）、兄弟が訴え合い、詭弁が横行していることにパウロは警鐘を鳴らします。そうして、6章11節の確認（…洗われ、聖なる者とされ、義と認められた）と、6章19～20節の確認と勧告（聖霊の宮、自分自身のものではない、からだをもって神の栄光を現しなさい）とをもって、一つのまとまりを締めくくっています。

このような文脈の中にあるパウロの判断と指導が、5章最初の段落です。5章1、2節で、パウロが聞き及んだ教会の状態、ある人のひどい罪、その事実に蓋をするかのようにして思い上がっている教会の有り様を非難します。3節では、私は、という強調から始まり、“からだとしては不在”だが“霊としては在”という対照を際立たせて、読者の注意を喚起します。さらに、「さばきました」という完了形動詞だけでも十分であろうところに、「すでに」という語を加えて強調していることにも目が留まります。力を込めてこの箇所を口述しているパウロの姿が思い浮かぶようです。

ここで“在”の語を重ねて用いている部分が、“在”である「かのように」なのか、それとも“在”「として」なのか、という課題があります。辞書的には両方の意味の可能性があり、第一コリントの29回の用例の中にも両方があります。例えば「私が願うのは、すべての人が私のように独身であること（7:7）」という例がある一方、「人は私たちをキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです（4:1）」や「私の愛する子どもとして論ずためです（4:14）」という例もあります。翻訳聖書の多くは5章3節を「かのように」と解して訳します。新改訳も同じで、“在”の一語を少し補足的に「実際にそこにいる者」と訳し、件の一語は「のように」としています。

しかし、文脈は「として」と理解することをより強く要請すると考えられます。4節に「あなたがたと、私の霊が… ともに集まり… 引き渡した」と続ける中で、パウロはサタンに引き渡すという行為にパウロ自身も主体的に関わっていることを強調しているからです。

サタンに引き渡すとは、教会の交わりから遠ざけ、サタンの支配するこの世へと移すという意味でしょう。その目的は悔い改めと回復です。罪の深刻さに気がつき、古い人の性質を悲しみ、悔い改めて主に立ち返ることが教会戒規の目的です。個人的な訓戒から開示された処遇を含め、戒規が今日の教会であまり機能していないように感じていますが、処罰ではなく、回復を目的とした戒規が豊かに用いられますように。

それにしても、“からだとしては不在”という現実と、“霊としては在”という事実は、ふつうは整合しないように思われます。にもかかわらずパウロはこれら二つの表現を統合して、実際にそこにいる者「として」さばいたと述べます。さばいた(判断した)の主語はパウロであり、その判断に基づいて引き渡した主体にパウロも含まれている、という論の流れです。とすれば、やはり「かのように」と述べたと考えるのでは不十分であって、「として」さばいたと解するほうが適切でしょう。G. Feeなど少数ながらそのように考える聖書注解者もいます。

ここでパウロの「霊」(3、4節)を感情ないし思考のような領域に限定してはなりません。5節の、彼の霊が救われるという表現を、気持ちや思想の問題に矮小化しないことと同様であって、この箇所「霊」は感情や思考にとどまらず、より包括的に人格を指す語です。主と交わる者は、主と一つの霊になる(6:17)という用例にも、そのような理解がよく表れています。この時のパウロは遠く離れたエペソにいます。“からだとしては不在”だが、気持ちだけはコリントの皆さんのところにあると言っているのではありません。パウロがこの判断を主導しているのであり、戒規を執行する教会の側に自分も参与すると言っているのですから。

身体を伴わない実在とでも表現してみましよう。“からだとしては不在”なのに“霊としては在”という主張について、合理的な説明はできそうにありません。しかし、身体的な現実を超越した、霊的な事実としての実在をパウロは主張していると考えることが文脈に適合していると考えられます。

3. 考察

以上の観察から、今日におけるオンラインの諸活動について、身体性重視とオンライン活動は両立すると考えられます。キリストのからだにおいて身体性が大切にされるべきであることはよく共有されている既知のことです。しかし、超身体性も実は既知のものであって、教会が了解し、実践してきたことと言えるのです。歴史の教会は、目に見えない神の現臨を認めてきただけでなく、パウロが上記の箇所で主張しているような霊的現実もまた了解し、実践してきたことです。

例えば病床洗礼を考えます。牧師一人で執行するのではなく、教会を代表する複数名がそれに立ち会うことが奨励されるとすれば、それは見えない教会がともにあることを告白する身体性重視です。しかし、危急の場面に他の誰も身体をもって立会うことができないとしても、牧師一人で洗礼を執行するときに、教会がその洗礼を覚えて、霊的な意味でともに居ることを大切なこととして教えているのではないのでしょうか。訪問による聖餐という例についても考えるべきですが、聖餐論全体に関わる大きな課題であり、ここでは議論に立入ることはできません。

以上のように、超身体性は、教会にとって、現代の技術が可能にした初めての体験ではなく、実は既知なのだと言うことができます。それは、対面で集うこととオンラインで集うこととの間に質的な差異が無いという意味ではありません。例えば、既述の全人性軽視の傾向があります。対応の可能性については次項で検討するとして、ひとまず、今日の身体性拡張の技術が、教会の超身体性の交わりをサポートするためにさらに用いられるなら幸いだと述べて、考察を結びます。

4. 課題と対応の可能性

最後に、改めて教会の「集まり」についてより具体的に考えておきます。オンラインの諸活動は、速やかに解消すべき次善の活動に留めるべきなのか、それとも現代の文化脈に照らして大いに活用すべきことなのでしょう。情報・通信をめぐる変化は加速度を増して、その環境は劇的に変化し、一新されるのでしょうか。手紙、電報（国内では1870年開始）、FAX（本格化は1980年）、e-mail、SNSという変遷を考えてみても加速は明らかです。音声や画像、映像の伝達も多角化し、そこにIoTやAIといった要素も加わっています。ICT（情報通信技術）の新しい環境は、企業や教育などの特別な分野に留まらず、市井の日常となりつつあります。世界中の常識を書き換えるのにさして年数がかからないのではないのでしょうか。

しかし、身体性拡張が教会にとって既知とも言えるように、今後の世界の様々な変化も、実は全く未知ということでないかも知れません。聖書に具体的な言及や指示が無いからと言って、聖書に聞くことを疎かにするのは愚かで、危険でしょう。実利的にではなく、本質論として、神がどのようにご覧になるかを聖書に尋ねることを大切にしましょう。

以下、課題と対応の可能性としていくつかの提案をし、今後の検討の課題にもふれておきます。

(1) 神との交わりについて

全人性軽視の風潮には特に注意を払う必要があります。「知り合い」という日本語の語感の変化も指摘されています。対面の、全人的な交流など思いも寄らないことで、選択した限られた情報の交換で十分であり、それがしばしば「盛った」情報であることも当たり前、というような考えが主流になりつつあるとも言います。そうなると、神を「知

り」、神との「交わり」を深め、神と「ともに」生きる、という概念が大きく変化するのではないのでしょうか。いや、すでにかかなり変わってしまっているのかも知れませんが、歴史との対話も大切です。聖書から神を知る経験の豊かさを教えられ、神との交わりに生きる実際について教えられることが有益です。教会教育を大切にしましょう。

(2) オンライン礼拝について

共同の礼拝にオンラインで集うことは、聖書の示唆する超身体性に鑑みて、可能であり、有効であると考えます。但し、現実を省みると、オンライン礼拝の寂しさを訴える声があり、その気軽さを喜ぶ声が聞こえてしまったり、軽率な“参加”の事例も聞くこともあります。礼拝に招かれている民が、聖別や奉献といったことを意識することもなく、“視聴”者に墮してしまう危険があります。これは、オンライン活動の問題という以上に、礼拝理解そのものの問題でしょう。個人の生活において、日々、自分を礼拝者として主の前に差し出し、聖さを追い求めている者にとっては、オンラインの礼拝は、困難はあるにしても、根本的な問題にはならないでしょう。その意味では、教会員の養育の課題であり、教会教育の課題です。ただ、交わりのなかで互いに！教え（コロ3:16など）、励まし合うという教会の機能が、オンラインの参集では著しい制限を受けてしまうというジレンマをどのように突破できるのか、知恵の要るところです。礼拝の結びにオンラインもインパーソンも会衆一同で声をあげて挨拶を交わしたり、報告の際に家族単位で近況報告と祈りの課題を分かち合ったり、あるいは礼拝直後に小グループに分かれて（Zoomのブレイクアウトルームなど）みことばの受け止めの分かち合いと祈りの時間を持ったり等の工夫を聞きます。教会学校や様々なグループ会がオンラインで集まることで、交わりの不足を補っている例も多数だと思えます。なお主の知恵を求めます。

献金の聖別についても同じように言えます。オンライン礼拝の導入が礼拝献金の減少を招くとしたら、（それだけですべてを説明できないとしても）オンライン活動の問題という以上に、聖徒たちの養育不足の問題かも知れません。コリント教会が教育と励ましを要したように（例えば、2コリ8、9章）、今日の私たちの教会においても献金について正面切って十分に教育することが大切であり、教会員において献金を励まし合うことが大切です。ある教会の礼拝では、献金の際に「オンラインで礼拝をささげている方々も、今一緒に献金を献げて、次に教会に来る機会にまとめてお届けください」などのアナウンスがされています。良い例だと思えます。

(3) 帰属と帰属意識

オンライン活動の拡充には、教会の帰属を曖昧にってしまう危険や、帰属意識を挫くような危険もあると考えられます。例えば、主日の礼拝をライブで、また録画で、いくつも渡り歩いて“観賞”することで満足してしまう危険はないのでしょうか。主の民の交わりの中で祈り、祈られ、励まし、励まされて生きる幸いを忘れてしまう危険や、帰属しないことを自由と勘違いして、根無し草のようになる危険が、オンライン活動には付いて回ります。

昨秋の宣教フォーラムで教会の地域性（locality）と公同性を確認したと述べました。宣教は回心者個人を産み落とすのではなく、教会を産み出すものです。地域に、組織された、目に見えるキリストのからだが増えて上げられることは神のみこころであり、教会を通して神のみわざが進展することを神は求めておられます。形式やシステムは多様ですが、神の民が地域教会に属していることは不可欠のことです。

オンライン活動の充実と教会の地域性（locality）の関係については、なお検討を要します。XRがさらに日常化して行くなかで、“地域”にlocalに“実在”しない教会がVR上に存在し、活動することは妥当なのかとか。他にも多くの検討課題が浮上してくるに違いありません。教会の協働による学びと検討、教唆と発信が求められます。

（４）異端の活発なオンライン活動

少し違った角度ですが、コロナ禍で異端のオンライン活動が活発だと指摘されます。ここでも教会教育が重要であり、神の民の相互の祈りと励ましが重要です。神の視座に立って識別できるように、一人ひとりが自分で聖書から神のことばを聞き取り、みことばを食べて養われるような大人の羊が育っていることが大切です。交わりの中で、また牧者に祈られている羊たちの群れを整えることがますます大切です。盗人や強盗（ヨハ10章）から守られて、豊かないのちに生きられるように。

（５）その他

オンライン活動に付随する課題の多くは、教会教育が課題解消の鍵でしょう。聖書そのものの教育をはじめ、他にもインターネットリテラシーにおける助け合いや、フェイクニュースやディープフェイクの横行する世界における情報識別の助けや訓練、識別のための技術革新など、課題は山積ですが、それらも含めて教会教育の充実を大切にしましょう。

むすびに

対面とオンラインを二項対立で考える必要はないと述べてきました。新しい技術や環境は、いつも注意深い識別と教育を要するものですが、恩寵の神が許しておられる良い物を見分けて、神の目的のために賢く管理し、用いるしもべたちであらせたいでしょう。

脚注

1. ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス』（河出書房新社、2018年）
2. マックス・テグマーク『LIFE3.0—人工知能時代に人間であるということ』（紀伊國屋書店、2019年）

2 集められる恵み

山田 泉

ウェスレアン・ホーリネス教団・ウェスレアンホーリネス神学院

はじめに

私たちは今、ウイルスと戦うのはこれほどにも困難なことなのかと思知らされています。ペストやスペイン風邪の悲惨さは歴史から学んでいるので、目に見えない細菌やウイルスとの戦いが簡単ではないことは承知しています。しかし、あの時とは時代が違う、これだけの医学水準、化学や情報技術を備えている今日、程なく封じ込めることができるだろうと楽観的に考えているところがあったように思います。ですが未だ出口は明確に見えず、苦戦を強いられている現状にあって、世界は、人間は、病だけではなく多くの課題に向き合わされることとなりました。先に JEA 神学委員会は新型コロナウイルス感染症 (Covid-19) 流行の初期段階で、励まし合うことの大切さを念頭に「新型コロナ時代を生きる教会」のテーマで、聖書の視点からの発表をいたしました。しかし長引く現状にあって「新型コロナ時代を生きる教会」パート2を編む今回は、教会・信徒の互いの励ましと共に、この時代を生かされている意味と使命を考えることを促されていると思います。Covid-19の終息はいつどのようになるのかわからないこれからのために、励まし合い、祈り合い、学び合っていくことの必要を思います。

1. 「新しい道が開かれた」

先日礼拝後、信徒の方に呼び止められ、その方がつくづく話してくださったことは「YouTube (当教会での媒体プラットフォーム) のありがたさを毎日感じています。本当にすばらしいですよ。これは教会だけに限ったことではなく、ありとあらゆる分野、場面において、どれほど可能性を広げ、どれほど時間・経済において有用かつ節約になっているか、このメリットははかりしれません。特に教会において、教会がこれほど変わったのは、変な話ですが、コロナのお陰と言ってもいいでしょう。もし、コロナが私たちの社会に発生しなければ、恐らく未だ教会はオンライン礼拝をここまで普及させるどころか、始めることすらなかったことは間違いないと思います。今までは出席できなければ、その日の礼拝はそれでなかったことになって終わってしまった。後で、説教要約を読んだにしても、説教テープを聞けたにして、オンラインで、オンタイムで、あるいは遅れてでも、いつもの会堂を見、説教者に目を向けながら礼拝に参加できることは、今までとは別次元の恵みが与えられています」と熱い口調で一気に語っていただきました。また昨年春、社会人となり地方での就職となった青年の送別会を行い、転地先での教会を紹介して送り出しましたが、教会でオンライン礼拝が始まっていたので、彼は他教会には行かずオンライン礼拝と一緒に礼拝をささげることを選びました。帰省された折には共にできている礼拝の感想を語り合い一体感を深めています。他にも高齢となり、

今まで出席していた教会には通うことが困難になったため、歩いて行ける教会を捜していました、と出席されるようになったご婦人が、この新型コロナにより母教会でオンライン礼拝を始めたので、「慣れ親しんだ礼拝と信仰の友と交われるようになりました」と喜んで帰って行かれました。

実にオンライン礼拝は、教会が必要としていた牧会ツールであったということです。海外出張、日曜出勤、ご高齢の方、体調不良、家族の用事が重なった方等々、様々な事情の方のためにオンライン礼拝は教会に必要であったのに教会は気がつかなかった、あるいは手をつけないでいたのだと思われています。以前少し関わらせていただいたCGNTVは、実際の教会が届かない部分を埋めるように使命をもっての活動であることを、今になって確認しています。オンラインによる伝道、牧会、教育を日本の教会に提供して下さる、その働きに関わらせていただきながらも、新型コロナ以前には自らの教会の日常に必要であること、日本の教会は自分たちもなすべきことだとは思いませんでした。心不足を感じています。

これからオンライン礼拝は広い目的をもって需要が増すことでしょう。それに対して、素人判断の希望を2点あげさせていただきます。

①オンライン環境を遍く広げる。

新型コロナの蔓延は、日本がデジタル面において、世界の水準から大きく遅れていることを国民は知ることとなりました。政府はその後デジタル庁を創設しましたが、当初学校は、オンライン授業への切り替えが家庭も学校も設備不足により行えないのが実情でした。教会も、信徒も状況は同様です。今は教会関係においても、オンライン礼拝のための助言指導をして下さるサイトがいくつかあるようです。それについての状況を詳しく承知していない者なので蛇足になるかと思いますが、ぜひイロハのイのレベルから手伝っていただける機関が身近にあってほしいと願います。特に人口少なく若者の流出激しい地域で、すぐそばにいる誰かわかっている人に聞くことができないでいる個人にも行き届く体制があればと願います。ネット関係は少し年配の世代の多くは不慣れた世界です。キリスト教書店のようなキリスト教ネット専門店、キリスト教オンライン電話相談所や出前企業などのようなものの普及があらばと思います。

②私たちの教会では少し前から、賛美や献金の時にはもう一つの設定画面で場面を切り替えるようにしました。それまで定点カメラによる講壇一点画像だったので、オンラインで参加される方は長い説教と全く変化のない映像との、ダブルの忍耐を要したことでしょう。ほんの少し画面が切り替わるようになった時、教会におられる他の方の姿を見ることができて嬉しかったとすぐに反応がありました。そこで機械担当の方に、礼拝開始前の待ち時間に、まるで外から教会に入ったかのように、玄関、週報ボックス、礼拝堂へと、歩いて行く情景は写せないだろうか。また礼拝中のプログラム進行の少しの間合いに、事前に撮っておいた目を休めるような映像を挿入できないだろうか、と相談す

ると、「できません」と即答されました。オンラインで参加されている方が、映像は常に同じアングルだからといって画面から目を話すと、気持ちも集中力も離れてしまいやすいのがオンライン礼拝です。でも、そこまでサービスする必要があるのかと問われるかもしれません。しかし伝道面を考えるならば、魅力ある画面にしたいという願いは湧いてきます。何種類かの既成プログラムなど、この分野の活発な展開を期待します。

オンライン礼拝の必要性有用性について述べましたが、次にオンライン礼拝の位置と礼拝の本質について考えます。自粛のため久しぶりにお会いした信徒の方から「礼拝、オンラインで見えています」という挨拶を聞くと、ここにオンライン礼拝について考えさせられる点があると思われています。O・ヴェーバーの『集められた共同体』に「教会は集められた共同体として認識されねばならない。」「教会は静止した状態のようなものではない。ある生きた何事かである。絶えず革新されて行く出来事である。神の民の集合は、共同体の招集において生起する。」と教会を定義します。非常事態を終えた時、個人が家庭で礼拝をオンラインで見ること、もつことはどう評価すべきでしょうか。

2. 「教会の本質」「エクレシア」を考える

(1) 信仰に立つために

新約聖書で教会をあらわすギリシャ語は「エクレシア」です。もとは「エクレシア」とは国のために召集された集会の意で、ギリシャの都市国家が市長を呼び集めるために鐘を鳴らし、「集まった人々」をエクレシアと呼んだことによるといわれます。この意味から転じキリスト教においては、神により「集められた人」を指し、神により集められた者とは、イエスキリストを信じる者、すなわち信徒の集まり、信仰共同体を指す語として使われています。

「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」(マタ 18:20) の御言葉が示すように、教会は建物ではなく、また人数の多少ではなく、信仰者の複数人数の集まりで、そこに神が臨在していることによります。旧約聖書学者フリーゼンが信仰共同体としての集まりについて旧約聖書におけるイスラエル部族を例にあげ、彼らの共同体意識の中心的動機は「彼らは血族関係だけではなく、歴史的な同体験による結合ということのみでなく、彼らが最も強く共同体形成を促進されたのは、信仰・ヤーウェ信仰であった」と指摘している如くです。「信仰」による集いが成立するには、福音の説教がなされていることが絶対の必要であります。「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」(ロマ 10:17) とあるように、御言葉を聞くことはオンライン礼拝でなされています。これはとても大事なことです。

敬虔派のウェスレーは、聞いた御言葉に対して個人の決心を重要視します。彼自身、悔い改めと信仰の決心をした体験を、彼の信仰生涯の起点となる重要体験の一つとして記録しています。アメリカ伝道の失敗に失意し、伝道の意味のみか、救いの意味さえも

からないのではないかと苦しむウェスレーが、アルダスゲートという所での小さな集會場で、ルターの『ローマ人への手紙註解』を聞きました。「その時、私の心はあやしく燃え立ってきた。私は自分が救われるためにキリストを——ただキリストのみを信じた。キリストが私の罪を取り去り、罪と死の中から救い出してくださったという確信をその時与えられた」との体験を、彼は何時何分ということまで記録します。『集められた共同体』に「まず初めに各人がキリストとの交わりに入り、次いで彼は共同体に繋がれるというのは、正しくないであろう。むしろ共同体は、身体的に死なれた方、身体的に復活された方と共に、すでに存在している」との指摘は真を得ており、あの時ウェスレーはアルダスゲートの集會場の人々と共同体となったというより、そこに臨在される主御自身との共同体に入れられたと理解します。オンライン礼拝を通して、御言葉が家に届き、魂に響き、その場で心が熱くなり、「主よ」と声をあげ、悔い改めと信仰の告白と祈りがなされる時、家で一人であっても、臨在される主との共同体は存在しているということです。その主との共同体は、やがてそのご家族に広がり、実数として二人または三人の共同体を形成しうる希望があり、オンライン礼拝はそのための有用な手段であると思います。

(2) 神と神の民との交わりを求めて

もう一つの視点に触れます。ルターにおいて、またカルヴァンにとって真の教会の標識は「1 神の言葉が説教されること、2 サクラメントが正しく執行されること」であるといわれています。「神の言葉が説教されること」の提示と共に、「サクラメントが正しく執行されること」を教会のなすべき働き、共同体がささげるつとめとします。聖餐式は、初期キリスト教において「パン裂き」としてキリスト教信者の集まりにおける重要な行為でありました(使徒 2:12,16)。当然一つの「パンを裂いて」みんなで食する共同体であり、その交わりをキリスト者の証として喜んだことが聖書より伝わってきます。この喜びの交わり、後の聖餐式の形態においても、この食卓の交わりをオンライン礼拝は提供できません。また「この方において、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり」(エペ 2:21)、「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです」(エペ 4:16)との教会形成・教会成長の場での経験をオンライン礼拝が提供することは困難です。

(3) 「集められる民」の恵みに生きる

旧約聖書において、救済とは「散らされた民を集める」ことと語られます(エゼキエル書 11:14-25)。エジプトの地で奴隷として苦しみ叫ぶ民の声を聞いた神は、モーセを立ててエジプト脱出をさせ、奴隷の苦しみから解放しました。しかし、その解放は終着点ではなく約束の地への出発点でした。神には、神を信じ従う者を導き入れたい約束の

地、神がご支配なされる恵みの場があるのです。

ボンヘッファー『共に生きる生活』に、ゼカリヤ書 10 章 8 節「わたしは彼らに合図して、彼らを集める。わたしが彼らを贖ったからだ」の聖句を通して、そのことはいつ起こるのだろうかと問いつつ以下を答えます。しばらく上書より抜粋引用します（※数字は筆者が便宜上つけたもの）。

①それは「散在している神の子たちを一つに集めるために」（ヨハネ 11・52）死なれたイエス・キリストにおいて起こったのであり、②最終的には、時の終わりに神のみ使いたちが四方から、天の果てから果てに至るまで、選ばれた者たちを呼び集める時に目に見える形で起こるだろう。（マタイ 24・31）③その時がくるまで、神の民はただイエス・キリストにおいてのみ結び合わされ、神を信じない者の間に散らされて、遠い国々にあつてイエス・キリストを思うということにおいて一つにされている。

集められることこそ贖いの果実であり、最終的に信仰者は神のおられる御国にて集められることに望みをおく者です。その時がくるまで、この地上で集められること、教会にて御国を思う恵みをあたえられているのだと教えてください。ボンヘッファーはさらに言葉を続けて「だから、キリストの死と終わりの日との間の時において、もし、キリスト者がすでにここで他のキリスト者との目に見える交わりに生きることを許されているとするならば、それは究極的な事柄が恵みにおいてすでに先取りされているのだと言うこともできよう」と、地上にて主にある兄弟姉妹の交わりをこよなく愛おしむのです。もう少しボンヘッファーの書から引用を続けます。「一つの信仰共同体が、この世において神の言葉と聖礼典にあずかるために目に見える形で集まれることを許されるというのは、神の恵みである。すべてのキリスト者がこの恵みにあずかるわけではない。囚われ人、病人、散らされて孤独の中にいる人、異邦の国にいる福音の宣教者などは、ただひとりである。彼らは〈目に見える交わりが恵みである〉ということを知っている」

おわりに

神の御計画は社会での不遇、苦勞、悲哀からの脱出で終わりません。私たちにはやがての時に、神と贖われた者との交わり、集められる恵みが約束されています。仮に今の生において多くの痛みや不安を抱えて生きねばならないとしても、今、教会にあつて神との共同体を与えられていることは、この上ない恵みであり神の国の一片です。

贖われ、救われた者は、神の備えたもう地とそこにある集まりを期待に夢膨らませ、進まずにはいられないのです。信仰がオンラインから始まり、またオンラインによって助けられましても、オンラインの中に留まるのではなく、届けられた神の言葉は信仰を育み、愛による祈りは聖霊によって信仰を成熟に導き、必ず居心地のいい家、都合のいい場から立ち上がり、神との交わりの食卓への集い、成長する共同体の集いを渴望する

者へと変えられます。ヴェーバーの言葉は『「私的キリスト者」は霊的に病んでいる。イエスキリストを、共同体の外部で「単独に」持とうとする者は、この方を、ごく安易に、単なる思想か、思想の創始者の一人に変えてしまう。』と厳しい表現で語っています。

ポスト・コロナにおいては、オンライン用いて、神の贖いにあずかる人の幅が広がり、かつ多く起こされることを期待し、教会には交わりの光景に輝きが増すことを信じます。

〔参考文献〕

オットー・ヴェーバー『集められた共同体』（畑祐喜訳）新教出版社 1979年

TH・C・フリーゼン『旧約聖書神学序説』（田中理夫、木田献一共訳）日本基督教団出版局 1977年

メソジストの一伝道者『戦う使徒ウェスレー』（瀬尾要造ほか共訳）福音文書刊行会 1989年

ディートリヒ・ボンヘッファー『共に生きる生活』（森野善右衛門訳）新教出版社 2018年

3 神のことばの伝達と媒体～ポスト・コロナに向けて

千代崎備道

日本ホーリネス教団・東京聖書学院

昨春、新型コロナウイルス感染拡大により緊急事態宣言が出され、キリスト教会でもリモートでの礼拝が広がり、そこには様々な課題があることが指摘される。同時に、インターネットを用いた宣教は以前から少しずつ始まっており、それが一気に拡大したという側面もある。コロナ禍が収束した後も、インターネットの利用は無くなるのではなく、その利点を生かすように様々な面で用いられると予測されると同時に、それが本質的な問題の原因となることも危惧される。本稿では、この問題の全てに取り組むことは難しいが、福音宣教を「神のことばの伝達」という面から考えることで、インターネットを用いた宣教について考察したい。それは、「聖書信仰」の立場に立つ者たちにとって、決して些細なことではないと考えるからである。

聖書の神は啓示の神であり、人間にご自身の「ことば」を伝えるお方である。その中心に聖書がある。「聖書信仰」の立場に立つ者として、神がどのように「ことば」を伝えておられるのか、またその伝達にどのように関わるのかは、重要なことである。

1. 神の言葉の伝達の歴史的展開

(1) 旧約聖書内における神の言葉の伝達

聖書に記述されていることが全て現代の教会の模範であるとは言わない。そこには人間の罪や弱さ故の失敗もある。だが、その失敗さえも用いる神の働きも啓示されている。その点に留意しつつ、神のことばがどのように扱われて来たかを、聖書内の歴史に沿って整理する。

保守的な立場ではモーセ五書を書いたのはモーセであり、そこから書かれた御言葉が始まるのであるが、モーセが神からの超自然的な知らせによって書いたとするのでなければ、彼が先祖から伝えられた一種の伝承が創世記の背後にあると考えることは、聖書信仰の立場から逸脱していないと考える。アダムやノアの出来事がアブラハムの一族によって伝えられ、エジプトに寄留していたイスラエル民族の中に保存されただろう。モーセがそれらの伝承を元にしてナラティブとしての創世記を執筆したときに聖霊による助けがあったと考えられる。この場合、媒体としては口伝による伝承のようなことを想定できるが、あくまで想像の域を出ることは難しいだろう。しかし、それが単なる部族・民族の伝承ということに留まらず、彼らの信仰している神が先祖たちにどう関わったかを教える点で、神について知ることのできる大切な教え（あるいは啓示）という側面があっただろう。この推測が正しければ、伝承という媒体からモーセによって記述された本（巻物）に変化したと考えられ、その目的は選民イスラエルがどのように誕生したか、またイスラエルの神がどのようなお方かを教えるためだったと思われる。

旧約聖書の土台とも言える律法（モーセ五書）、特に出エジプト記以降において、神はモーセを通してイスラエルの民に語られている。モーセが神の代弁者として直接に語る場面もあるが、それを「媒体」を用いてイスラエルに与えるようになる。最初は「石の板」、やがて「書」（巻物）として書き記されたのは、その言葉を記録し、後の時代の民（具体的にはヨシュア時代の民）にも伝えるためである。さらに、書かれた書（の一部）を王が写本として所有することも命じている。ただし、その内容を勝手に書き加えたり減らすことを禁じている。この律法は聖所（神殿）で祭司やレビ人を通して民に語られ教えられた。

預言者の時代となり、「先の預言者」（いわゆる歴史書）に登場する預言者たちは、その初期においては民に語ったことや奇跡を行ったことなどが三人称的に記録されているが（例えばエリヤやエリシャ）、後には直接に肉声で語るだけでなく「記述預言者」として書き残すようになっていく。例えばイザヤが書き残し弟子に保存させたのは、マナセによる迫害の時代を越えて後の時代に預言の確実性を伝えるためであると考えられる。エレミヤも焼却された巻物を再度書き残し後代に託した。

諸書が発展していく中で、神から人という方向だけでなく、人から神への言葉である祈りと賛美が詩篇という形で編纂され、それが神からの「ことば」として正典に組み込まれるようになっていく。また箴言などの中にも、人間的な知恵であるが、それが神の知恵の一部に含まれていく。これらがユダヤ教正典として受け入れられるためには時間がかかったが、最終的には多様な書物が聖書となっていった。また神殿が無くなった捕囚時代に、各地に会堂が作られ、そこで聖書が読まれ教えられるようになっていった。これは神殿再建後にも続いていく。

旧約聖書の内部に描かれている歴史において、神の言葉は、イスラエルの民を教えるために伝えられ、さらに後の世代にも伝え続けるように形成されていった。その媒体は、伝承から記述文書、また編集されたものと言った様々な形式を経て、後代へと伝搬されていく。

（2）旧約聖書の伝搬と翻訳

旧約聖書が現在の形に確定するのは紀元1世紀だが、それ以前に大枠は決まりつつあった。すでに著者直筆の書は失われているが、写本の技術が発達していき、また各地の会堂で用いられて多くの写本が広範囲に広められていった。さらに紀元前3～2世紀に七十人訳を初めとするギリシャ語への翻訳が行われ、異なる文化の人々（ギリシャ語を話すユダヤ人も含む）への伝搬がなされるようになる。後にキリスト教との対立の中でユダヤ教ではヘブル語聖書に重きが置かれるようになる。

（3）新約聖書の確立と伝搬

最初の教会では「聖書」は旧約聖書のことだったが、まずキリストの教えを、さらに使徒たちの教えを書き残す必要が生まれ、福音書や書簡が各地の教会に広まっていった。

その中から徐々に「正典」として特別な役割を果たすものが定まっていき、各地の教会で教えるために写本として複製されていく。初期は写本の技術としては精練されていなかったが、伝道の熱意により短期間で広範囲に広がっていった。物質的な媒体として巻物からコーデックスが増えていく。またギリシャ語からラテン語など複数の言語に翻訳されていった。

(4) 教会の発展と聖書の翻訳

世界宣教の使命から教会は地中海世界、そしてさらに広範囲に福音を広めて行くが、文化や言葉の違いもあり、翻訳聖書も増えていった。カトリックではラテン語聖書が正典のような地位を占めるようになるが、宗教改革から原典の重要性が増すと同時に各言語への翻訳も拡大していった。媒体としての言語が多様化していったが、同時にその内容を損ねないために正しい翻訳やその前提となる正しい解釈が重要になる。

(5) 近代から現代へ

印刷術の発展などの要因から聖書は爆発的に多く作られるようになる。当初は聖書を印刷することへの反発もあったが、大量生産が可能となり個人でも所有できるようになることは大きな益を教会に与えたと言えるだろう。さらに時代が進み、福音を伝える方法として印刷物だけでなく、大衆伝道からラジオ・テレビ伝道に発展し、説教が書籍・カセットテープ、CDなどの媒体でも伝えられていった。やがて聖書そのものも録音され、それからデジタル化、そしてインターネットを媒体としての広まりを持つようになる。特にインターネットの普及は最小限の時間差で全世界に発信することが可能となる。媒体が加速度的に多様化していく。また教会という場に限られず、スマートフォンなどで個人的に聖書を読むことも多くなっていった。

2. 神の言葉の伝達の時間的空間的広がり

最初は神からのことばは、神から直接の語りかけ（例、創世記 12 章など）により伝えられるが、すぐに人（モーセ、預言者）を介して多くの人々（イスラエルの民）に伝えられ、さらに後の時代の人にも伝えるように石や羊皮紙などに書かれていった。書物として書き残すことにより、広範囲、また長期にわたる伝達が可能となってくる。

翻訳は言語や文化の違いを乗り越え、イスラエルだけでなく世界中の民に御言葉を伝えることが可能となっていく。ただ、写本や翻訳による「劣化」を避けるための技術が必要とされる。しかし新約聖書が爆発的に広まって行ったことに見られるように、小さなミスがあっても、少しでも早く広く伝えることも求められていった。

翻訳上の不十分さを埋める方策として、改訂や新たな翻訳によってより良いものが作り続けられていった。また媒体も、使い難い石や陶器などから羊皮紙やパピルス、巻物からコーデックスへと発展してきたように、その時代の可能な限り良いものが用いられてきた。

また宣教の方法としては、新約時代は使徒のような伝道者が旅行しつつ伝えていったが、国教化されて宣教の広がりが弱くなった時代を経て、宣教師たちが海外へと派遣され、都市部での大衆伝道、ラジオ・テレビ伝道、文書伝道など多くの手法が用いられてきた。そしてインターネットを用いた宣教活動へと発展していく。さらに、インターネットの道具を用いることで、従来の会場では集まることができなかった大人数や遠距離の人々も参加あるいは視聴できるようにも出来るし、反対に、一対一あるいは少人数を対象にした小グループの学びも可能となってきた。

3. コロナ禍およびコロナ後における御言葉の伝達

コロナ禍において教会の宣教活動は大きく制限されてきたが、それを乗り越えるように、様々な工夫がされていった。教会堂での礼拝という直接に会って声を通して御言葉を伝える方法が困難な場合には、インターネットを用いて YouTube などの一方通行の配信や Zoom のような双方向の通信技術が用いられた。少しアナログ的だが、文書の郵送やビデオや音声をテープや CD などに記録して送る方法も併用されている。個人的な伝道も SNS などのツールを用いることが若者たちの間では盛んとなってきている。新しい方法にチャレンジすること自体はこれまででもなされてきたことだが、新しい方法にはデメリットもあり、批判も受ける。だからこそ、正しく御言葉を伝えるという意識を持って、吟味しつつ運用することも大切である。今後、コロナ禍が終わって以前の手法が再開すると共に、ますますインターネットなどの新しい媒体を用いた伝道が活発になり、その中でいかに神の言葉を正しく伝えるかが問われていく。

おわりに

新しい方法が必ずしも正しいわけではないが、必要があるのに古い伝統的な方法に留まることは宣教の使命を制限してしまう。神が人を用い、特に教会を用いて御言葉を伝えることには変わりはない。

ただ、それが技術優先あるいは人間の都合が優先されて間違った方向に行かないように、批評を受け止めつつ、つねに吟味し続けることは必要である。聖書内での手法の発展や媒体の変化は、それ自体が現状（新しい方法）を保証するのではないが、一つのモデルとして見る時に、伝達と媒体の変化は必ずしも否定されるものではないことは、キリスト教の歴史においても見ることができる。つねに議論し続け、より良い方法を模索し、そのときに聖書が教える原則に導かれていくことが、聖書信仰に立つ私たちに求められているのではないだろうか。

新型コロナウイルスの感染拡大が人間社会に及ぼした一つの影響は、コミュニケーションの阻害かもしれない。直接に会って、顔と顔を合わせて語り合うことが難しくなる。マスクのために発声も聞き取りも難しくなったため、特に高齢者にとっては情報のやり取りに不自由を感じている。教会も、宣教においても交わりにおいても、その制限を受けて活動が滞っている。「しかし、神のことばはつながれていない」（2テモ 2:9）。

神のことばを伝える対象が少人数から大人数になっても、目の前の相手から遠い将来の子孫へと変わっても、様々な方法や媒体を用いて対応してきた。不信仰のために心が鈍くなり、耳が遠くなり、目が閉ざされても、神の熱心と聖霊の働きは、預言者たちや使徒たちを通して続けられてきた。今日、コロナ禍による障害も、神のことばを伝えることを止めることはできない。

4 これからの教会の在り方を考えるーポスト・コロナ時代を見据えてー

篠原基章
東京基督教大学

はじめに

コロナ禍を経験している教会にとって重要なことの一つは「教会とは何か」という問いをそれぞれの状況において問い直し、新たな想像力をもって教会を再構築していくことではないでしょうか。今までとは異なった状況下に置かれたことで、これまでとは異なる視点から教会の在り方を見つめ直す契機を与えられているように思うのです。新型コロナウイルス感染症によって今まで当たり前とされてきたことが制限され、社会全体が立ち止まることを余儀なくされました。しかし、立ち止まることは決してマイナスのことだけではありません。立ち止まることは考えるために必要な機会でもあるからです。そして、何よりも大切なことは進むべき方向性を見いだすための機会でもあるということです。

1. 「グレート・リセット」(The Great Reset)

危機は苦難の時ですが、同時に変革の時でもあります。「グレート・リセット」(The Great Reset) という用語は、2021年の世界経済フォーラム(ダボス会議)のテーマとして掲げられたことで広く知られるようになりました。この会議はコロナ禍にあって開催されませんでした。私たちがどのような時代に生きているかを明瞭に言い表しています。現代社会は数多くのひずみを抱えており、社会全体を構成する様々な基本的なシステムを白紙に戻して、新たな仕組みを一から構築する「グレート・リセット」の必要性が叫ばれています。このような新たな体制への模索の時代に私たちは生きています。

コロナ以前から深刻化していたさまざまな問題がこのパンデミックにより顕在化しました。今私たちに求められていることは、コロナ危機と向き合うことを通し、その背後にある以前から潜在化していた問題を乗り越えていくことではないでしょうか。コロナ禍にあって問われていることは、コロナ対応のみにあるのではなく、コロナ後の世界を見据えて抜本的な変革を準備していくことではないかと思うのです。

これは教会においても同じだと考えています。コロナ前から存在していた教会の問題のひとつひとつと向き合い、勇気をもって、既存の枠にとらわれない新しい道に踏み出すことが求められています。今回のことを一過性のこととして、やり過ごすことはできません。しかし、私たちに求められていることは、新しい時代を見据え、変える必要がある部分に関しては変革をしていくことです。この際、教会の本質と形式を区別することが重要です。なぜなら、しばしば本質と形式を混同する過ちを私たちは犯すからです。教会の本質は変わることはありません。しかし、教会の形式は時代的・社会的・

文化的な状況において変わりうるのです。教会の歴史を紐解くとき、教会は異なる歴史的・社会的・文化的な状況に応じて自らを変革させてきました。

私たちは教会が教会であることとはどういうことかについての固定的なイメージをもっています。そして、そのイメージは教団・教派の伝統や個々の教会の文化によって異なるでしょう。このこと自体が教会の在り方の多様性を示しています。大事なことは、ただ一つの絶対的な教会の在り方があるのではなく、歴史的にも神学的にも多様性があったということです。新約聖書は驚くほど豊かで多様な比喩表現やイメージを用いて教会の鍵となる本質的な性質について描き出しています。例えば、「神の宮」(1 コリ 3:16)、「神の建物」(1 コリ 3:9)、「キリストのからだ」(1 コリ 12:27; エペ 1:23)、「神の家族」(エペ 2:19)、「新しいエルサレム」(黙 21:2) などその表現は多岐に渡っています。おそらく、聖書の中でこれほど異なる多様な表現が用いられている用語はないのではないのでしょうか。このことは、教会の深さ、豊かさ、そして広さを表しています。教会はその本質的な性質に根ざしつつ、それぞれの社会的・文化的な文脈の中で自らを形成していく責任を帯びています。

また、新約聖書が教会の具体的な在り方についての画一的なモデルを提示していないことに注意を払うことは非常に重要です。初代教会において、教職を含む教会の在り方は固定的というよりも流動的でした。新約聖書の時代において、教職は固定的・制度的な役職ではなく、流動的・機能的な務めであったのです。しかも、教会の働きは教職者の務めというよりも、信仰共同体全員にそれぞれの役割が与えられていることが強調されています(エペ 4:16; 1 ペテ 4:10)。初代教会は固定的・制度的ではなく、流動的・機能的な教会であったのです。ここに初代教会が自由闊達であった理由が隠されているように思います。これこそ私たちが最初に取り戻すべき原則であるように思うのです。

教会は神によって聖定された恵みの手段です。その教会の本質は変わることはありません。しかし、その教会がどのようなものとしてこの世に提示されているかは私たちに委ねられた責任です。私たちは教会の在り方に対して責任を負っています。今日の教会において求められていることは、自らを意識的に変革する決意(コミットメント)だと言えるでしょう。変革の時代にあって、教会そのものが自己を創造的に検討することができるかが問われています。

2. 霊的な交わりの共同体としての教会

コロナ問題に直面した教会は、「集まること」を制限されたことで、これまで以上に教会の霊的な共同体性を意識するようになったのではないのでしょうか。教会に一堂に会することができなくとも、信仰共同体としての教会は存続しているという経験をしました。私自身、オンラインでの礼拝を数カ月経験しましたが、特に礼拝での牧会祈祷の時間は特別なときでした。目を閉じ、祈られる祈りに耳を傾けることで、場所を越えてキリストにあって結び合わされ、互いに霊的に繋がる信仰共同体であることをこれまでになくリアルティで実感することができました。

「集まること」が制限される経験を通し、私たちは「散らされる」という経験をしました。そのことによって、これまで以上に互いを思い、互いのために祈り合うという経験をしたのではないのでしょうか。教会は散らされていても教会です。散らされていたとしてもそこには見えない霊的な交わり（コイノニア）が確かに支配しているからです。ヨハネの黙示録を記したヨハネは、最晩年を流刑地パトモス島で孤独な獄中生活を送りましたが、そこで「主の日に御霊に捕らえられ」（黙 1:10）、天的な礼拝を捧げます。目に見える経験としては兄弟姉妹との交わりを持つことができない状況にありましたが、ヨハネはそのような状況にあっても確かな兄弟姉妹との目には見えない霊的な交わりの内にあることを自覚していました。その霊的な交わりは、「イエスにある苦難と御国と忍耐にあずかる」（黙 1:9）者たちの交わりであり、孤島での苦しみも「神のことば」と「イエスの証し」（黙 1:9）のゆえであるとヨハネは語っています。流刑地にありながらも天的な礼拝を捧げたヨハネに主イエス・キリストは現れ、様々な幻を通してヨハネと苦難の中にある諸教会を強め励ましたのです。

コロナ禍にあって、教会の兄弟姉妹の交わりは強くされ、牧会的な配慮は以前にも増して深まったように思います。教会における霊的な共同体感覚の深まりは、コロナ後の教会の在り方を考えて行く上での重要な足がかりとなっていくことでしょう。

3. 「集められた教会」と「散らされた教会」

私たちは「散らされる」という経験をしました。しかし、これは旧・新約聖書においてイスラエルの民と新約の民が経験してきたことでもあります。コロナ禍にあって散らされた経験をした私たちは、一つに集まることのできる恵みと幸いを体験的に知ることができました。実にキリストにあって一つに集まることは、キリスト者に与えられた神からの恵みの賜物です。別言すれば、キリスト者同士が一つに集まることは決して当たり前なことでも自明的なことでもないということです。この世にあっては、散らされた状態こそが常態であるからです。そのような意味で、目に見える形で一つ所に集まることのできることは特別な神の恵み以外の何ものでもないのです。「散らされる」経験を通し、一つに集められることは、私たちキリスト者にとって神の恵みであり、すなわち特別なこととして再発見する機会が与えられたと考えています。

それと同時に、「散らされる」ことの意味を深めることも重要です。この世にあって、キリスト者は散らされた存在であるからです。これはコロナ以前も以後も変わることはありません。宣教の神は集める神であると同時に、散らす神でもあります。主日の礼拝において、散らされている私たちが一つに集められ、そして、この世の様々な場所と領域に再び散らされます。キリスト者は、種子のように神の意志によって地上のあらゆる場所に蒔かれる離散の民です。私たちが散らされる目的は、それぞれが散らされた場所において「祝福の基」（創 12:1-3〔口語訳〕）として生きることです。教会は「集められた民」と同時に、「散らされた民」でもあるのです。教会は教会堂の敷地内にだ

け存在するのではなく、教会の生命は散らされた神の民を通して人間社会全体へと注がれていくのです。

そして、聖書は散らされた人々が再び集められることを確かな約束として語っています。詩篇 133 篇（「都上りの歌」）は、まさに集まることの幸いを思い起こさせてくれます。「見よ。なんとという幸せなんとという楽しさだろう。兄弟たちが一つになってともに生きることは。」（詩 133:1）。また、イザヤ書 11 章 10 から 12 節において、主なる神が散らされた人々を地の四方から集められる終末的な幻が語られています。散らされた民が集められることは、終末的な待望の出来事でもあるのです。「わたしは彼らを諸国の民の間にまき散らすが、彼らは遠く離れてわたしを思い出し、その子らとともに生き延びて帰って来る」（ゼカ 10:9）。そして、それは「散らされている神の子らを一つに集める」（ヨハ 11:52）ためにも死なれた主イエス・キリストにあって実現しました。たとえ私たちが散らされた状況にあって離れ離れになることがあったとしても、主イエス・キリストにあって私たちは常に一つなのです。

4. 聖霊に導かれる有機的な教会

コロナ問題に直面したことで、私たちは教会が第一義的に制度ではなく、むしろ有機的な信仰共同体そのものであることを理解するようになりました。このことは教会の本来的な在り方を再考する重要な契機になると考えています。これまでの教会は無意識の内に固定的な型に囚われてきたように思います。多くの日本の教会は、牧師と教会堂を中心軸とした「一教会一牧師」型をベースにしていますが、これはかつての西洋キリスト教国をモデルとしています。

「一教会一牧師」型が悪いということでは決してありません。このモデルは日本においても機能してきたと思います。しかし、このモデルのみが教会の形ではないことを認識することは非常に重要です。高度に複雑化した現代社会においては、多様な教会の形や在り方が必要とされているからです。「一教会一牧師」型の弱点は、固定的でルーティン化された制度的教会に陥りやすいことにあります。このような制度的教会では、教職者主導のフォーマルな教会活動に力点が置かれる傾向があります。

教会が制度化していくことは自然の力学であり、秩序を保つために一定の制度化はどのような組織であっても不可避な要素です。また、聖書は秩序や立てられた権威を重んじるよう明確に教えています。しかし、教会が制度化に極端に傾くとき、教会は聖霊の力を失ってしまいます。聖霊の働きは風のように自由であり、有機的です。そうであるなら、教会の在り方も活動も本来的に自由であり、有機的であるはずですが、教会が世界の他の団体や組織から区別されるのは、教会に生命を与えるこの聖霊の力と働きによるのです。

5. 信徒の理解と位置づけの回復

これからの教会の在り方を考えていく上で、教会は信徒の位置と役割を根本的に見直していくことが鍵となると考えています。信徒 (laity) という用語は教職 (clergy) との対比において一般的に用いられていますが、教会の歴史においてこの対比的な区別は誤った問題を生み出してきました。教会の教職制度は、教会が制度化する中で形作られてきましたが、そのことによって教会での信徒の位置づけが後退してきた歴史があります。このような教会的状況に一石を投じたのが宗教改革でした。その当時の教会は霊的階級 (教皇、司教、司祭及び修道士) と世俗階級 (諸侯、君主、手工業者、農業者) とに分かれていましたが、ルターは万人祭司の原則を掲げ、すべてのキリスト者は神の前にひとしく霊的な階級に属する神の民であり、王なる祭司 (1 ペテ 2:9) であると説きました。しかし、そのような伝統に立つプロテスタント教会も常に牧師中心主義や制度化された教会活動に陥る危険性にさらされていることを自覚することは重要です。信徒の本質的な位置づけと役割を取り戻すことで、教会はより本来あるべき姿を取り戻すことができるのではないのでしょうか。

信徒を主体とした有機的な共同体としての教会理解は、今後ますます重要になってくるでしょう。世界に目を向けるとき、信徒を主体とした「下から」(from below) の教会運動は全世界に広がっています。この運動はキリスト教基礎共同体 (Basic Christian Communities) と呼ばれ、その起源はさまざまですが、ラテンアメリカのカトリックの信徒たちが社会的現実において聖書を読むために集まった信徒の主体的な運動として発展してきました。この運動の背景には、ラテンアメリカの教会と信徒たちがおかれていた厳しい社会的現実があります。軍事政権による圧迫下にあって、常に不安定な社会状況に置かれていたラテンアメリカのキリスト者たちは、聖書を読み直すことを通し、厳しい現実を捉えなおそうとしたのです。ラテンアメリカのカトリックの聖職者たちは、このような信徒の運動を助言者として支えました。驚くべきことは、この運動がプロテスタントよりも明確な聖職制度の伝統をもつカトリックにおいて起こったということにあります。このような信徒を主体とした「下から」の教会運動は、今日では全世界に広がっており、この運動はラテンアメリカからの大きな貢献として理解されています。

宣教とは神がその民 (信徒と教職) を世に遣わしてなさしめようとする神の包括的な働きです。複雑化する社会にあって、これまで以上に包括的な宣教の在り方が必要とされています。信徒はまさにこの包括的な宣教の働きの担い手であり、信徒こそが教会の最前線にあるのです。教会において、教職と信徒はそれぞれに務めを果たす使命を帯びており、両者は教会と宣教における本質的な構成要素です。信徒の役割と使命を教職者の位置と同じ本質的なものとして取り上げることが求められています。

おわりに

私たちは「グレート・リセット」の時代に生きています。ポスト・コロナ時代の教会は、これまでの固定化した教会モデルから自らを解き放ち、変革力、柔軟性、適応力を

兼ね備え、教職と信徒が協同する有機的な信仰共同体としての教会へと変わることが求められているように思います。教会はそもそも聖霊によって導かれる根源的自由を土台とした神の民の共同体だからです。教会が聖霊に導かれた神の民の共同体として自らを全面的に問い直すことを通して、新たな宣教の在り方も見えてくると考えています。

教会は、この変革の時代にあって神の国の到来の徴として召されていることを自覚する必要があるでしょう。教会は単に必要に迫られて自らを変革するのではなく、時代の先駆けとしての変革が期待されています。教会はこのような積極的な変革の使命をも帯びているのです。

〔参考文献〕

チャールズ・リングマ『風をとらえ、沖へ出よー教会変革のプロセサー』

(深谷有基訳) あめんどう、2017年

デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換(下巻)ー啓蒙主義から21世紀に向けてー』(東京ミッション研究所訳) 新教出版社、2002年

ディートリヒ・ボンヘッファー『共に生きる生活』(森野善右衛門訳) 新教出版社、2004年

ヘンドリック・クレマー『信徒の神学』(小林信雄訳) 新教出版社、1987年

ヘンドリック・クレマー「日本の教会に対する批判」『革新される教会』

日本基督教団宣教研究所、196年

フィリップ・ヤンシー『教会ーなぜそれほどまでに大切なのかー』いのちのことば社、2008年

ローザンヌ世界宣教協議会『ケープタウン決意表明』(日本ローザンヌ委員会訳) いのちのことば社、2012年

5 コロナ禍で問い直す社会・政治・経済

青木 義紀

日本同盟基督教団・東京基督教大学

はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の脅威が、これまでの日常を大きく変えました。その結果私たちは、生の様々な局面で問い直しを迫られ、変わりゆくものと変わらないもの、変わってよいものと変わってはならないものの識別を求められているように思います。ここでは、広く世界に目を向け、コロナ禍において一人の信仰者として問われ、考えさせられていることを記します。取り上げる課題は、社会、政治、経済の3つの分野です。いずれも一つ一つが大きな課題で、その中にさらに多様で複雑な課題が数多く存在しますが、そこに分け入って詳細に論じることは紙幅の制限と筆者の力量不足の両面からして不可能です。筆者は、社会学、政治学、経済学の専門家ではありません。あくまで一信仰者の視点から問題提起をすることしかできません。むしろこれを一つの契機とし、読者諸賢によるさらなる展開と考察、場合によっては修正を期待するものです。

1. 社会

(1) 人との距離

感染の危険は、人との距離を大きく変えました。これまでなら、隣人愛や人を思う気持ちを率直に物理的な距離で表すことができました。近付いて声を掛けること、そっと手を置いてさすったり温もりを伝達したりすること、同じ空間を共有することなどは、素直に愛の現われと認識できました。しかしコロナ禍では、近づくことは配慮のないことになりかねません。触れることは感染の危険をもたらします。長く空間を共有することは批判の対象になります。その結果、リモートやオンラインが多用されるようになりました。便利で安心な反面、やはり対面の重要さや必要性を実感したのも事実です。コロナ禍以前から、人と人との距離は、人それぞれ快適と感じる距離が異なるため難しさがありました。コロナ禍で一層、適度な人との距離の保ち方が問われるようになりました。それは、隣人を「個」として見つめ、相手にとっての益とは何かという愛の基本を問い直す機会でもあると思われています。

(2) 分散

コロナ禍は、国際間移動の爆発的拡大や都市の発展を生み出したグローバル資本主義に起因する面があると言われます。その結果、これからは「大規模・集中」から「小規模・分散」への転換が加速すると予想されています(1)。ここにバベルの塔のできごと(創11:1-9)が重なるように思います。民が散らされるのは神のさばきですが、そこには「生めよ。増えよ。地に満ちよ」(創1:28)という(2)。また、迫害に遭って散らされること

は、さらなる福音宣教の拡大として用いられました(3)。「分散」が「分断」にならず、むしろこれが神の国の進展と拡大の契機となることを期待しても良いと思っています。

(3) 同調圧力

コロナ禍で露呈したのは、日本に浸透する「同調圧力」の存在です。それは、みんなが同じであることを暗黙の内に強要し、多数派や主流派の「空気」に従わせようとする力学です。これが「自粛警察」や「マスク警察」を生み出す背景となりました。多くの日本人は、「同調圧力」がもたらす閉塞感や束縛に不自由さを感じながらも、それに抗えないジレンマに悩まされています。これを打ち破るのにキリスト教がもたらす貢献は決して小さくありません(4)。真の意味で人を自由にする福音がますます浸透し、悩む人々の救いと解放が実現することを願ってやみません。

2. 政治

(1) 問われた民主主義

ウイルスの脅威への対処に、有利なのは独裁体制か民主主義かという議論がありますが(5)、とりわけコロナ禍で問われたのは民主主義のあり方でした。初期対応に右往左往する各国の首脳の中で、ドイツのメルケル首相のコロナ対応は高評価を得ました。それは、「開かれた民主主義」を意識して、政治決断の透明性を確保し、国民の理解を求めて丁寧に説明することに傾注したからです(6)。仕事帰りに首相自ら近所のスーパーに立ち寄って買い物をする日常が報道され、庶民感覚を持つ指導者の姿に人々はますます信頼を厚くしました。また国民生活が制限されることで生じる損害に対して、補償する政策を次々と打ち出したことも評価されています(7)。それに対して日本の政府や首相のコロナ対応は、残念ながらどんなにひいき目に見ても、ここまでの高評価には至っていません(8)。民主主義の要点は、指導者が国民を信頼するからこそ政策の根拠や数値的裏付けを開示し、困難や制限を強いることに協力を求めることができるという面と、国民の側が指導者を信頼するからこそ彼らに従っていけるという面の両面があると思います。その相互の信頼関係の上に民主主義は成り立つのだと言えます。指導者と国民の信頼が相互に高ければ、危機の時代も協力して乗り越えていけますが、互いに不信が募る関係では、危機の時代こそ民主主義はいよいよ限界を迎えることになります。人に寄り添い、人々の必要に応え(マタ 4:23)、柔和(マタ 12:20)に仕えることで真の指導力を発揮したイエス・キリストに範を見出す「サーバントリーダーシップ」が求められていると言えます(9)。同時に、指導者に求めるばかりでなく、私たちも信頼される民衆であることが重要だと感じるのです(10)。

(2) 自粛の要請

各国が都市封鎖(ロックダウン)という強行政策をとる中、日本政府がとったのは「自粛の要請」でした。法律の建て付け上、現行ではこれが限界で、法改正を求める政治家も少なくありません。「自粛」の「要請」という言葉自体に、矛盾があると指摘する人もいます。結局、国民は「要請」されたことに重きを置いて責任を政府に求め、政府は

「自粛」を強調して責任を個人に押し付けるという、責任のなすりつけ合いが起きています(11)。実際、度重なる緊急事態宣言にもかかわらず、その効果は鈍化し、もはや個人の努力に頼るだけの時期は終わったと言われていています。政府が強制力のある政策を取ることによって感染の抑制に効果が期待できる一方、個人の自由や権利が制約を受けることとなります。反対に、個人の自由と権利を確保するために「自粛」に任せているだけでは、感染拡大はますます深刻化することが目に見えています。このような葛藤の中で「緊急権」（緊急事態下の国家権力）のあり方が問われています。

（3）緊急権

コロナ禍で、今まで以上に政治が重視され、平常時にはないほどの巨大な権力が政府に託され、短時間の決断と実行力が求められています(12)。このような独裁的な強権が部分的に求められるような現状で、古代ローマの「独裁官」という制度的官職に注目が集まっています。ローマの独裁官には、戦争などの緊急事態に超法規的な措置を行う権限が与えられていました。その権限は期限付きで、一定の期間が過ぎると終了し、終了後にはそれが適正であったか厳格に審査されるのです。もし権力の濫用があったと判断されれば処罰を免れませんでした(13)。今般のコロナ禍で、これに類似した制度を求める声があります。社会学者の大澤真幸氏は、緊急権は特別措置法に基づいて行使されても、たとえそれが憲法に盛り込まれていたとしても憲法違反だと主張します(14)。しかし憲法には逆説があって、憲法の本来の目的を果たすために、憲法違反である緊急権が必要となる時があるというのです。大澤氏によれば、戦争や今回のパンデミックも同じで、このような状況下で首相は緊急権を行使しなくてはなりません。緊急権の正当性は、憲法や法律にあるのではなく、それは憲法制定権力である国民にあり、それは本来的に人民に備わっている力だといいます。政府が、緊急時に憲法の制定から離れて行動できるのは、憲法制定権力を有する人民が、自分たちの利益にかなった政府の行動を許容するからです。逆に、緊急事態条項が憲法や法律に規定されると、政治家が過剰に行使するときも、反対になかなか行使しないときも、どちらも言い訳に使われるということが起こります。それゆえ緊急権は、憲法違反を承知の上で、国民の利益のために行使されるべきだということです。この場合、ナチスが全権委任法によって独裁を可能にしたような事態を回避するために、大澤氏は少なくとも二つのことが重要だと指摘します。一つは、必ず期限を定めて宣言することです。必要な場合は、改めて期限を定めて延長することです。もう一つは、緊急権を行使した政治家（総理大臣）は、緊急事態の終結後、必ず一旦辞職し、議会などの然るべき機関によって緊急権の行使が適切であったか審理を受け、場合によっては刑罰をもって政治責任を取ることです。この場合、宣言すべき時に緊急事態宣言を発しなくても責任を問われることとなります(15)。

この世は、神が支配する世界ですが、完成を迎えるまでは歪みと悪が影響を及ぼす世界でもあります。その中で、相対的ではあっても神の支配を実現するためには、民主的な方法で客観性を確保することが一つの有効な手段だと思います。その現状を考慮すると、緊急事態をめぐる首相の権利の行使に関する大澤氏の提言には、重要な示唆がある

ように思います。

3. 経済

(1) グローバル資本主義への警告と経済の必要性

コロナ禍は、行き過ぎたグローバル資本主義がもたらした結果だと言われます。しかし同時に、自粛や行動制限などで引き起こされた経済活動の停滞が、閉店や廃業を生み、人々の生活を圧迫しました。コロナ禍は、経済の危険と必要性の両方を味わう結果となりました。大事なことは、行き過ぎた経済活動ではなく、バランスの取れた経済活動であり、人間をトータルに幸せにする経済のあり方です。神にある正義と公正が支配する経済活動とは何か。欲望に支配されるだけの経済活動ではなく、真の意味で人間を生きかし、すべての人を全人的に祝福に導く健全な経済のあり方とは何かを問い直す時であるように思います(16)。

(2) 格差社会

コロナ禍は、一方ですべての人を無差別に感染の脅威にさらすという意味で人間の平等性を知らしめました。しかしもう一方で、新型コロナウイルス感染症による致死率が、富裕層に比べて貧困層が何倍も高いと言われており(17)、コロナ禍は格差社会を露呈したとも言われています。『21世紀の資本』の著者トマ・ピケティは、格差は自然に生まれないと主張します(18)。格差は、経済やテクノロジーによって自然に生み出されるのではなく、政治が作り出すと言うのです(19)。彼によれば、格差自体が悪いのではなく、なぜそれが妥当かを説明するのが必要なものであって、問題は行き過ぎた私有財産の不可侵性にあると言います(20)。そして私有財産の「社会化」や「時限化」など蓄積された富の再分配を様々なかたちで提案しています。このような発想は、聖書に見る「ヨベルの年」(レビ25章)に通底するものがあるように思います。すべての人が、神のかたちに創造された尊厳を持ち、生活に必要なものを受けて生きる権利を持っています。それが公正に保障される社会を作らなければならないと思います。

(3) 働き方改革の促進

コロナ禍で、多くの人が働き方の改革を余儀なくされています。実際に一部の業種・職種によっては、リモートワークが進みました。反対に、リモートワークが難しい業種・職種も浮き彫りになりました。しかしたとえリモートワークが難しくても、ストレス社会の中で、快適な労働環境を整備し、より良い働きを継続できる工夫がなされる必要があります。必ずしも生活の必要のためだけでなく、存在価値や生きがいのために仕事に従事する人もいますし、社会の必要に応えるために献身的に身をささげる人もいます。神の支配が行き届く世界を実現するために、そしてその中で、私たち自身が主であって生き生きと生きるために、私たちに労働が与えられているという創造の原点に立ち返って、働き方を見直す必要があるように思います。

むすびにかえて

コロナ禍は、私たちの生活に大きな衝撃を与え、社会、政治、経済のあり方を揺さぶりました。その結果、社会とは何か、政治とは何か、経済とは何かという本質を改めて問い直す機会となっています。そして神の創造された世界において、社会とはどうあるべきか、政治とはどうあるべきか、経済とはどうあるべきかを改めて考えることが求められています。そのために、「創造—墮落—救済—完成」という聖書的・救済史的な枠組みというキリスト教世界観に立って、各分野の専門家の知恵に学ばせてもらいながら、主にあって自分も隣人も生かす社会の構築を求めたいと思います。コロナ禍という「いのち」の危機に直面し、肉体のいのちと共に、私たち自身を全人的にうるおすまことの「いのち」の大切さを改めて強調したいと思います。

脚注

1. 森永卓郎「新型コロナ禍は行き過ぎたグローバル資本主義への警告」『新型コロナ 19 氏の意見：われわれはどこにいて、どこへ向かうのか』106-110 頁
2. Gerhard C. Aalders, *The Bible Student's Commentary Genesis* vol. 1 (trans. William Heynen; Grand Rapids, MI: Zondervan, 1981) p. 249 (11:8 の注解部分)、服部嘉明『創世記に聞く：今日を明日に生きる』(ユーオディア、1997 年) 53 頁、Victor P. Hamilton, *The Book of Genesis Chapters 1-17* (NICNT; Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1990) p. 356. 特に脚注 19 参照。古代教父ヒエロニムス (ca. 340-ca. 420) は、自身の説教 (Homilies 21) の中で、「離散は、散らされた人々にとっても確かに益であった」と語っている。Cf. Andrew Louth, ed., *Ancient Christian Commentary on Scripture: Old Testament I Genesis 1-11* (Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 2001) p. 169; オリジナルは次の著作である。Fathers of the Church: A New Translation (Washington, D.C.: Catholic University of America Press, 1947-) 48:170.
3. 使徒の働きでくり返されるフレーズは「こうして、神のことばはますます広まっていき、...大勢、次々と信仰に入った」(6:7) という類のことばである。「散らされた人たちは、みことばの福音を伝えながら巡り歩いた」(8:4) と言われている。迫害や追放が、さらなる福音宣教の契機となっている。他にも以下を参照。8:25, 9:31, 12:24, 13:49, 16:5, 19:20 など。
4. 鴻上尚史・佐藤直樹『同調圧力：日本社会はなぜ息苦しいのか』35-53 頁 この中で鴻上は、同調圧力を生み出す根本的なメカニズムを「社会」とは区別された、日本特有の「世間」に見出す。佐藤は、「世間」を構成する四つのルールを挙げる。「お返しのルール」、「身分制のルール」、「人間平等主義のルール」、「呪術性のルール」。「お返しのルール」とは、お中元やお歳暮などもらったら必ず返さなければならないという日本特有の思考のこと。「身分制のルール」は、年上・年下、目上・目下、格上・格下などの序列が、人間関係の力学を決めること。「人間平等主義のルール」とは、仲間であるという連帯意識で、裏を返せば「違う人にならないで」という束縛のこと (出る杭は打たれる)。「呪術性のルール」は、友引に葬儀を避けるとか、大安に挙式するとか、「香典半返し」といった根拠のない慣習・迷信・俗信に縛られること。佐藤は、以上のような「世間」や「同調圧力」のない欧米文化にキリスト教の貢献を挙げている。「お返しのルール」に関するキリスト教の影響については 45 頁、「人間平等主義のルール」の個人の確立におけるキリスト教の影響については 44-45 頁、「呪術性のルール」に関するキリスト教の迷信潰しについては 48 頁を参照。
5. ユヴァル・ノア・ハラリ「脅威に勝つのは独裁か民主主義か 分岐点に立つ世界」朝日新聞社編『コロナ後の世界を語る：現代の知性たちの視線』54-73 頁
6. Cf. 最上敏樹「世界隔離を終えるとき」村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる：私たちの提言』184-197 頁、特に 194-195 頁。2020 年 3 月 19 日 (木) に行ったメルケル首相のスピーチは以下のようなものでした。那須田淳「ドイツに見る民主主義と政治の責任：メルケル首相が言葉と行動で示したこと」『新型コロナ 19 氏の意見：われわれはどこにいて、どこへ向かうのか』90-91 頁、「今日このようないつもと違った方法で、皆さんに

- 話しかけているのは、この状況下で連邦首相としての私、さらに連邦政府の同僚たちが、これから何を導こうとしているのか、直接、お伝えしなかったからです。開かれた民主主義にとって必要なことは、私たちの政治的決断を透明にし、説明することです。私たちの行動の根拠をできる限り示して、それをお伝えし、伝達することで、みなさんの理解を得られるように努めなければなりません。もし、市民の皆さんがこの課題を自分の課題として理解することができたなら、私たちはこれを乗り越えられるはずですが。このため次のことを言わせてください。事態は深刻です。あなたも真剣に考えてください。東西ドイツ統一以来、いいえ、第二次世界大戦以来、これほど市民の一致団結した行動が重要になるという課題が、わが国につきつけられたことはありませんでした。」
7. 那須田淳「ドイツに見る民主主義と政治の責任：メルケル首相が言葉と行動で示したこと」『新型コロナ 19 氏の意見：われわれはどこにいて、どこへ向かうのか』92 頁、「メルケル首相は、自由を奪うという民主主義の危機を打ち出しつつ、スピーチと一連の政策を組み合わせることで、民主主義とは、政府と市民の相互の責任と努力によって成り立つものであることを、双方に認識させたのである」、多和田葉子「ドイツの事情」村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる—私たちの提言』（岩波新書、2020 年）92-98 頁、特に 92 頁、「ドイツでは、メルケル首相がコロナ危機への対応によっていつも以上に国民の信頼を得ている。なぜ、どういう政策をとるのかを明白にその都度わかりやすく落ち着いて説明してくれるからだろう。彼女の演説には、物理学者としての冷静さと、子供たちを守るためなら何でもしようというお母さんの強さと温かさが感じられる」。Cf. 御立尚資「コロナ後の世界を創る意志」『変質する世界：ウィズコロナの経済と社会』112-127 頁、特に 126 頁、「ドイツのメルケル首相が国民に行なったスピーチが話題になったが、人びとに協力と行動変容を求めていくには、科学的知見を平易な論理で語る力、そして弱者への目配りを怠らず、論理だけでなく感情にも訴えるリベラルアーツ的な識見・能力も必要であることも明らかになった。メルケル首相は、それらを組み合わせたコミュニケーションを行なう力を示した。」
 8. Cf. 御厨貴「コロナが日本政治に投げかけたもの」村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる：私たちの提言』126-139 頁
 9. 「サーバントリーダーシップ」(Servant Leadership) は現在、一般の社会でも注目されている。サーバントリーダーシップについては、以下を参照。ロバート・K・グリーンリーフ『サーバントリーダーシップ』金井壽宏監修・金井真弓訳（英治出版、2008 年）、池田守男・金井壽宏『サーバントリーダーシップ入門』（かんき出版、2007 年）、真田茂人『サーバント・リーダーシップ実践講座』（中央経済社、2012 年）、ロバート・K・グリーンリーフ『サーバントであれ：奉仕して導く、リーダーの生き方』野津智子訳（英治出版、2016 年）、ジェームズ・ハンター『サーバント・リーダー：「権力」ではない。「権威」を求めよ』高山祥子訳（海と月社、2012 年）
 10. フランシス・フクヤマ「ポピュリズムと『歴史の終わり』」クーリエ・ジャポン編『新しい世界：世界の賢人 16 人が語る未来』60-69 頁 この中でフクヤマは、パンデミック対応の明暗を分けたのは、公衆衛生と緊急事態に関わる国家の能力次第だと述べると同時に、「それはまた、国家や指導者、その賢明さに人びとが寄せる信頼次第でもあります」（63 頁）と指摘している。
 11. 綿野恵太「『ウンコ味のカレーか、カレー味のウンコか?』という究極の選択には『カレー味のカレー』を求めるべきである。』『思想としての＜新型コロナウイルス禍＞』（河出書房新社、2020 年）143-150 頁、特に 144 頁、「日本政府のコロナ対策は『自由主義世界』を尊重するかに見えて、ただの『自由放任』であり、『消極的な無責任』というべきである」。また 145 頁、「『自由放任』 = 『消極的な無責任』によって引き起こされたのは、『自粛』が市場道徳となり、ひとびとが相互に監視するパニックである」。Cf. 荻谷剛彦「『自粛の氾濫』は社会に何を残すか」Voice 編集部編『変質する世界：ウィズコロナの経済と社会』165-178 頁 この中で荻谷は、自粛による行動の統制は、人々の道徳に訴えるものであり、それは結局、責任の主体を曖昧にすると指摘する。
 12. ユヴァル・ノア・ハラリ「私たちが直面する危機」クーリエ・ジャポン編『新しい世界：世界の賢人 16 人が語る未来』（講談社現代新書、2021 年）9-25 頁、特に 15 頁。彼は、「民主主義は、市民の健康の保護という名の下に、簡単に独裁に変わります。この脅威は取るに足らないものではありません」（18 頁）と警告している。むしろ、市民に対するしっかりとした科学教育、大学・病院・新聞社などの独立した強力な機関を育てることが重要だという（20, 24 頁）。また緊急時に政府が断固とした行動を求めることは、民

- 主義に反しないと断言する。Cf. ユヴァル・ノア・ハラリ「脅威に勝つのは独裁か民主主義か 分岐点に立つ世界」朝日新聞社編『コロナ後の世界を語る：現代の知性たちの視線』54-73 頁
13. 宇野重規「コロナ危機、民主主義、そして世界的連帯」筑摩書房編集部編『コロナ後の世界：いま、この地点から考える』142-159 頁、特に 144-145 頁、宇野重規「政治思想史における危機対応—古代ギリシャから現代へ」『東大社研・玄田有史・飯田高編『危機対応の社会科学 上 想定外の危機を越えて』（東京大学出版会、2019 年）
 14. 大澤真幸「不可能なことだけが危機をこえる：連帯・人新世・倫理・神的暴力」『思想としての〈新型コロナウイルス禍〉』2-32 頁、特に 17-21 頁。橋爪大三郎『国家緊急権』（NHK ブックス、2014 年）Cf. 大屋雄裕「自由と幸福の相克を乗り越えられるか」Voice 編集部編『変質する世界：ウィズコロナの経済と社会』153-164 頁、特に 159-162 頁 棟居快行「災害と国家緊急権」関西学院大学災害復興制度研究所編『緊急事態条項の何が問題か』（岩波書店、2016 年）1-28 頁
 15. 大澤真幸「不可能なことだけが危機をこえる：連帯・人新世・倫理・神的暴力」『思想としての〈新型コロナウイルス禍〉』20-21 頁
 16. カナダ出身のジャーナリストであるナオミ・クラインは、観光立国であるニュージーランドを、早くに国境封鎖して感染対策に成功した国と評価し、ジャシンダ・アーダーン首相が提案した週四日労働を紹介している。それによると、アーダーン首相は、国民の働く時間を減らす反面、賃金は据え置き、余暇はレジャーなどで安全に自国を楽しんでもらうことで、観光収入と国民の心身の健康の両面を維持しようと考えたという。このような「スローダウンした生活」が、大切だとクラインは主張する。ナオミ・クライン「スクリーン・ニューディールは問題を解決しない」クーリエ・ジャポン編『新しい世界：世界の賢人 16 人が語る未来』105-106 頁 同様の指摘は、以下を参照。Cf. ダニエル・コーエン「豊かさと幸福の条件」前掲書 113-138 頁、特に 118-120 頁
 17. 小野昌弘「免疫からみえるコロナの行く末」筑摩書房編集部編『コロナ後の世界：いま、この地点から考える』（筑摩書房、2020 年）14-44 頁、特に 42 頁
 18. トマ・ピケティ「ビリオネアをなくす仕組み」クーリエ・ジャポン編『新しい世界：世界の賢人 16 人が語る未来』139-163 頁 cf. トマ・ピケティ『21 世紀の資本』（みすず書房、2014 年）
 19. 経済学者の松尾匡（立命館大学経済学部教授）は、東京財団政策研究所が 2020 年 3 月 17 日に発表した経済政策に関する緊急提言が、驚くほど政府が打ち出したコロナ対応の経済政策と類似しているという。その内容を要約すると、次のようになると指摘する。Cf. 松尾匡「コロナショックドクトリンがもたらす円高帝国」筑摩書房編集部編『コロナ後の世界：いま、この地点から考える』102-124 頁、特に 102-103 頁、「ひと言でいえばそれは、コロナショックをてこにして、日本のエリート層が共有するであろう経済認識を一気に実現しようとするものである。大企業をもうけさせ、中小の事業者は淘汰されるに任せ、職を失った大衆には低賃金労働に就かざるをえなくさせ、激安輸入品で生命をつなげばいいというのが、エリート層の経済確認の基本発想である。」
 20. ハーバード大学の人気教授マイケル・サンデルは、格差社会の要因を「能力主義の闇」に見る。勝ち組の人たちは、自分が成功したのは自分の実力だと考えがちだという。実力で成功したのだから、市場社会における成功者への配分を受け取って当然と考え、置いてけぼりになった人々を自業自得と見下すことになる。サンデルはこれを「能力主義の傲慢」と呼ぶ。

6 AI 技術の成熟と教会を考える～30 年後を見据えて～

能城一郎

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団・中央聖書神学校

「新型コロナウイルス時代を生きる教会パート1」では、(1) はじめに技術の習得ありき (2) 聖書を読むことの新スタイル (3) YouVersion と AI 技術 (4) 日本語聖書の訳語データ・ベースの構築 (5) 神学的特異年 2054 年 (大シスマ) の項目で神学エッセイを書かせて頂きました。今回は、前回の内容、特に、「日本語聖書の訳語データ・ベースの構築」を補完する原稿を書かせて頂きます。副題の「30 年後を見据えて」は、AI 技術が成熟を迎え、その光と影が明らかにされるのは、30 年後であり、ここ数年は、成熟に向かう一コマに過ぎないという、筆者の継続研究のビジョンを示したものです。

1. 一步一步、経験値を積上げる

「一步一步」という訳語は、新共同訳にしかありません。このような聖書の訳語情報を提供するのが、現在開発している AI 技術に必須の「ことばの情報群」(ビッグ・データ) です¹。新共同訳が「一步一步」を当てる箴言 16 章 9 節の翻訳比較を以下に列挙しました。



【聖書協会・共同訳】

人間の心は自分の道のことに思いを巡らす 主がその一步を確かなものとする。

【新改訳 2017】

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、【主】が人の歩みを確かにされる。

【新共同訳】

人間の心は自分の道を計画する。主が一步一步を備えてくださる。

【口語訳】

人は心に自分の道を考え計る、しかし、その歩みを導く者は主である。

「一步一步」、「その歩み」、「その一步」の原語を知りたいければ、BibleHub (無料) のサイトに行き、一つの経験値を自らの身に刻むことが可能です。

Proverbs 16 - Click for Chapter

①	6806 [e] ša-’ā-dōw. :צֶדְרוֹ his steps N-msc 3ms	3559 [e] yā-kin :יָכִין directs V-Hifil-Imperf-3ms	3068 [e] Yah-weh :יְהוָה but Yahweh Conj-w N-proper-ms	1870 [e] dar-kōw; :דַּרְכּוֹ his way N-csc 3ms	2803 [e] yə-ḥaš-šēb :יְחַשֵּׁב plans V-Piel-Imperf-3ms	120 [e] ’ā-dām :אָדָם of man N-ms	3820 [e] lēb :לֵב A heart N-msc
---	--	--	--	--	--	---	---

(<https://biblehub.com/interlinear/proverbs/16-9.htm> ①)

箴言 16 章 9 節に含まれる、「聖書信仰のことば」を整理するには、同サイトの「DBT」にアクセスをします。

「一步一步」は、8125 番の「guidance・導き、*Promise*・約束」であると分かります。

(<https://biblehub.com/topical/dbt/8125.htm> ②)



「8125」をクリックすると、解説画面が表示されます。

「DBT」は、「聖書信仰のことば」を 1000 番から 9000 番の九つに分けています。

(https://biblehub.com/topical/dictionary_of_bible_themes.htm

③)

「8000 : The life of the believer・信者の生活」、「8100 : The life of faith・信仰生活」、「8124 : guidance・導き」、そして、「8125 : guidance, God's promise of・神の約束の、導き」と区分けされています。

続いて、「みことば、神の民に対する導きの約束を証している」と総括的な解説文の他、「導き、神の約束の」に関する聖書箇所が全て網羅されています。濃厚（ビック・データ）な聖書研究の経験値の積み上げを可能にしま

③ 8125 guidance, God's promises of

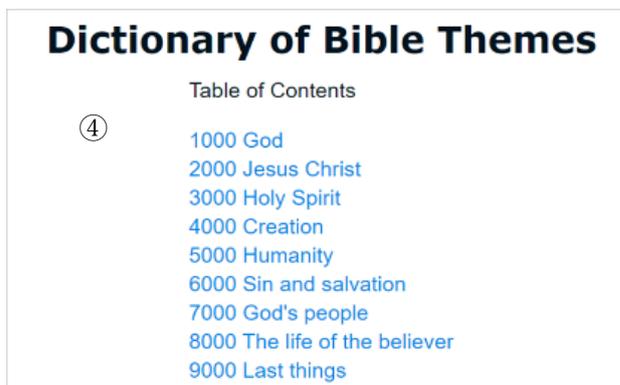
Dictionary of Bible Themes

[Dictionary of Bible Themes](#) » [8000 The life of the believer](#) » [8100 The life of faith](#) » [8124 guidance](#) » [8125 guidance, God's promises of](#)

Scripture bears witness to God's promises of guidance for his people.

All God's intentions will be realised

す。(<https://biblehub.com/topical/dbt/8125.htm> ④) 「DBT」は、「聖書信仰のことば」の AI 技術につながる基本的要素の一つであるビック・データを備えています。あくまでも私見ですが、「DBT」には、一見、複雑で対立的に見える「翻訳の違い」の諸相を

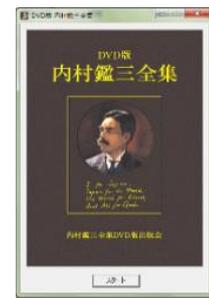


「プロセス思考」²で、平和裏に一致を実現する機能が備わっています。この平和と一致の営みを成熟に至らせるには、これを利用し、「一步一步」経験値を積み上げる聖書信仰を共有する次世代の存在が不可欠です。「DBT」は、英国の福音派の知的営みの継続性を備えたプロダクトです。もし、日本の宣教のために、日本語聖書版の「DBT」を世に

出現させることを願うならば、次世代のデジタル・コンテンツ・クリエイターの存在が不可欠です。これからの AI の技術者には、昭和なプログラミングをはるかに凌ぐ、現時点での AI プログラミングの能力、さらに、スーパー・コンピュータ、量子コンピュータを取り扱える能力が必要です。ポスト・コロナ時代、30 年後を見据えて、Z 世代³、α 世代というキーワードが、ネット検索の上位を占めています。聖書信仰の世界観を持つ Z 世代に宣教のバトンをつなげる、「聖書信仰の成熟をめざし」⁴、持続可能な第 7 回日本伝道会議@東海 2023 の開催を願うものです。最後に、百年前の内村鑑三の「聖書の研究」スタイルについて紹介をさせていただきます。

2. 百年前の「聖書の研究」

2010 年に、内村鑑三全集の DVD が出版されました。全文がデジタル情報で読めるだけでなく、全文の語句検索機能が搭載されています。内村の生きた時代の「聖書の研究」のスタイルを探るために、DVD を「聖書の研究」で検索を試みました。結果を見ると、「聖書の研究」の語句は、244 件ヒットしました。内村の「聖書の研究」の全貌を彼の全集から文献学的に纏めるには、この 244 件の頁を文脈から読み解く必要があります。まさに、「一步一步」の知的営みが必要となります。



1 件を読み解くの
に 10 分とする
と、2440 分、約

26	306	聖書の研究をして居るか、小道徳や小改善や社会救済位を目的
26	363	聖書の研究である、聖書の中には明かに神の御旨が記されてある、
26	401	聖書の研究も凡て無益である、愛敵の人ならずば基督教でないの

41 時間が必要です。1 日 6 時間をこの研究に充てると 7 日が必要です。この研究を始めて何日目かに、全集 26 巻 363 頁（第 47 講 キリスト教道德の性質 12 章 2 節）の文章にくぎ付けになりました。以下、便宜的に、DVD のデジタル情報と並行して、2019 年に出版された佐々木忍訳の『ロマ書の研究』と新改訳 2017 の翻訳（ロマ書 12 : 2）を以下に記します。

然らば神の旨を知るの道如何、或は天然の中に或は世界の推移の中にこれを探ることが出来る、併し先づ第一には聖書の研究である、聖書の中には明かに神の御旨が記されてある、

それでは、神の聖旨を知るにはどのようにするのであろうか。それは自然の中や世の移り変わりの中を探ることができる。しかし、何よりもまず大切なことは聖書の研究である。聖書の中には明らかに神の聖旨が記されている（現代に語る内村鑑三『ロマ書の研究 下』142 頁）。



ローマ人への手紙 12 章 2 節

この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。

先に紹介した、BibleHub（無料）のサイトの「DBT」（<https://biblehub.com/topical/romans/12-2.htm>）を見ると、「神のみこころ」は、1175 番で示されています。1000 番台は、「神論」です。8000 番台は、「信者の生活」というカテゴリーです。その項目数は、14 件（8145 : renewal・

刷新、8211 : commitment, to world・迎合、世に対して・・・) もあります (⑤)。コロナの影響下で、日常生活が激変してしまい、「神のみこころ」を探り求めている信徒の皆さんは少なくはないはずです。それを導き出すのは、今も昔も「聖書の研究」であると、内村鑑三は全集で明示しています。聖書関連の AI 技術は、まだまだ進行形です。「一歩一歩」の「聖書の研究」の経験値を積み重ねた先に、AI 技術が「聖書の研究」に貢献できる分野が明らかになって行くことでしょう。「ゆとり」「さとり」「つくし」、「Z・α」世代、老若男女に向けて、『デジタル聖書研究のすすめ』⁵ ということで、キーを打ち終わらせて頂きます。

Dictionary of Bible Themes	
Romans 12:2	
1050	God, goodness of
1100	God, perfection
1115	God, purpose of
1175	God, will of
4030	world, behaviour in
5334	health
5345	influence
5542	society, positive
5894	intelligence
5904	maturity, spiritual
6030	sin, avoidance
6185	imagination, desires
6627	conversion, nature of
6650	finding
8145	renewal, people of God
8211	commitment, to world
8217	conformity
8227	discernment, nature of
8302	love, abuse of
8321	perfection, divine
8348	spiritual growth, nature of
8351	teachableness
8466	reformation
8484	spiritual warfare, enemies
8738	evil, victory over
8821	self-indulgence
8832	testing
8848	worldliness

は、14 件（8145 : renewal・刷新、8211 : commitment, to world・迎合、世に対して・・・) もあります (⑤)。コロナの影響下で、日常生活が激変してしまい、「神のみこころ」を探り求めている信徒の皆さんは少なくはないはずです。それを導き出すのは、今も昔も「聖書の研究」であると、内村鑑三は全集で明示しています。聖書関連の AI 技術は、まだまだ進行形です。「一歩

一歩」の「聖書の研究」の経験値を積み重ねた先に、AI 技術が「聖書の研究」に貢献できる分野が明らかになって行くことでしょう。「ゆとり」「さとり」「つくし」、「Z・α」世代、老若男女に向けて、『デジタル聖書研究のすすめ』⁵ ということで、キーを打ち終わらせて頂きます。

脚注

1. コロナ禍の中で、筆者は、フランシスコ会訳聖書（2011）、2020 年 4 月にダウンロード版ソフト、また聖書協会・共同訳（2018）、2021 年 8 月にダウンロード版ソフトの発行をさせて頂きました。第 7 回日本伝道会議@東海 2023 では、P1「聖書信仰の成熟を求めて」の中で、7つの翻訳聖書（口語訳、新改訳第 2 版、新共同訳、新改訳改訂第 3 版、新改訳 2017、聖書協会 共同訳、フランシスコ会訳）の訳語データ・ベースを紹介する計画です。
2. エリヤフ・ゴールドラット『ザ・ゴール』（ダイヤモンド社、2001 年）
3. 1996 年~2012 年生まれの現在 25 歳から 10 歳の年齢、生まれた時からスマホ、タブレット等の操作に長けた世代、とされています。
4. 能城一郎「IT と聖書信仰-聖書信仰の教育の道具としての IT 利用を考える」『聖書信仰の成熟をめざして』（JEA 神学委員会編、いのちのことば社、2017 年）106 頁に、「情報化社会とキリスト教」、111-112 頁に「プログラミング技術者とキリスト教世界観」について書かせて頂いたのでお読み頂ければ幸いです。

5. 能城一郎「Jーばいぶるテクノロジーの活用-聖書研究と宣教」『宣教と神学』24号(2002年)

〔参考文献〕

大城可奈子〔監修〕『超実践-AI人材になる本-プログラミング知識ゼロでもOK』学研プラス、2021年